タイトル：2020 年度教育セミナー（第 16 回）
日時：2020 年 9 月 17 日（木）～20 日（日）
オンライン開催

「非イスラーム世界のイスラーム：中国におけるムスリムの宗教性と民族性をめぐって」
奈良雅史（国立民族学博物館）

本講義では、中国におけるイスラーム系少数民族・回族の宗教実践を事例として取り上げ、現代中国におけるムスリムのあり方について「敬虔さの後回し」という概念を手掛かりに考察した。

回族は伝統的にモスクを中心としたコミュニティを形成してきた。しかし、改革・開放以降、都市部では再開発や流動人口の増加により、漢族をはじめとする非ムスリムとの雑居率が高まっている。その結果、回族のあいだではイスラームを実践しなくなるなど漢化の現象がみられる。一方で、改革・開放以降、宗教政策の緩和により、イスラームに関わる活動が活発化するとともに、厳格なイスラーム言説が影響力を増しつつあり、「正しいイスラーム」を志向する敬虔な回族も増えている。また、遺族によって死者の名においてなされる喜捨などが土着化した結果だとして否定される傾向にある。こうした状況下、回族のあいだでは伝統的に不可分とみなされてきた回族という民族的カテゴリーとムスリムという宗教的カテゴリーを区別するようになってきた。

このように改革・開放以降、回族のあいだでは宗教生活の社会的基盤が弱体化する一方で、宗教的規範が強まってきた。つまり、回族は漢族を中心とする中国社会と否応なくより一層関わらざるを得ないと同時に、敬虔なムスリムであることが求められるという二律背反の状況に置かれているのだ。それは回族にとって「生きにくさ」を拡大することとなった。

こうした「生きにくさ」に直面するなか、中国社会から逃げてイスラーム圏へと移住してしまう回族もいる。しかし、多くの回族にとって海外への移住は容易ではなく、中国社会における「生きにくさ」に対処する必要がある。その対処のあり方のひとつは、就学や就職に際して、ヒジャーブ着用や礼拝などで必ずしも十全にイスラームを実践できない状況を一時的な状態をみなし、「敬虔さの後回し」をすることである。この実践は一見すると、個々の回族の「生きにくさ」への対処に見える。しかし、この「敬虔さの後回し」は、一時的に「非敬虔」を引き受け、経済的に身近なムスリムを支援するなどすることを通して、「敬虔さ」を託すことと、その還元に期待するという、他者との関係において実践されている。

こうしたプロセスからは、イスラーム復興に伴い、「正しいイスラーム」への志向が強化されるなかで否定されてきた、死者の名による喜捨にみられるような社会関係に埋め込まれた「敬虔さ」を巡る実践が形を変えて現出していると考えられる。